

令和元年 11 月 20 日

令和元年度第 1 回総合教育会議 会議録

長岡市



1 日 時 令和元年 11 月 20 日 (水曜日)

午前 9 時 30 分から午前 11 時 00 分まで

2 場 所 アオーレ長岡 第二応接室

3 出席者

市長 磯田 達伸

教育長 金澤 俊道 教育委員 鷺尾 達雄 教育委員 青柳 由美子

教育委員 大久保 真紀 教育委員 荒木 正

4 職務のため出席した者

教育部長 小池 隆宏 子ども未来部長 波多 文子

教育総務課長 曾根 徹 学校教育課長 中山 玄

子ども家庭課長 田中 剛 学校教育課主幹兼管理指導主事 神林 俊之

学校教育課主幹兼管理指導主事 高橋 和久

5 事務のため出席した者

教育総務課長補佐 安達 紀子 教育総務課長補佐 植村 裕

教育総務課庶務係長 佐藤 裕

## 6 会議の経過

(小池教育部長) 令和元年度第1回長岡市総合教育会議を開催する。まず、会議を主催する磯田市長から挨拶をお願いしたい。

(磯田市長) 教育大綱は、乳幼児期から義務教育終了までの長い期間に渡る長岡市の子育て支援と教育に関する基本的な理念と方針を定めたものである。今年度、改定の時期を迎えたので、次期教育大綱の策定に向けて皆様と協議させていただきたい。長岡市では、「熱中！感動！夢づくり教育」という長岡らしい特色ある教育に取り組んでおり、一定の成果が上がっていると認識している。しかし、世界は10年、いや5年、3年、2年と短いスパンで急激に変化してきている。また、イノベーションをはじめとした何か新しい文明が起ころつつある予感もあり、人類にとって新しい段階に入ったと実感している。子どもたちが必要なものを学んでいるのか、我々が子どもたちに必要なものを与えているのか、そして、新しい時代を迎える力を子どもたちが体現しているのか、よく考えなければならない。夢や希望を持ってと言っているが、もっと基本的なものがあるのではないか。基本に立ち返る必要もあるのではないかと考えている。夢や希望は自分が必要だと思えば持てばいい。親が必要だと思う夢を子どもに無理やり押し付けるのではなく、子ども自身がそれが必要かどうかをよく考えなければならない。親、先生、社会に要請されなくても自分が良いと思うものを求めて、自分というものを実現するのが理想である。また、教育に関すること全てを学校に求めてはいけない。教育大綱で方向性を定めたら、学校の外で学ぶ機会や学びの場を教育委員会とは別の部局で作っていくことも考えている。忌憚のない意見をお願いしたい。

(小池教育部長) 議事に入ります。議事の進行は市長にお願いします。

(磯田市長) では、最初に概要、スケジュールについて説明をお願いします。

(小池教育部長) (資料に基づき説明)

(磯田市長) 教育大綱の概要、策定スケジュールについて質問はありませんか。

(質問なし)

(磯田市長) それでは、次期教育大綱について説明をお願いします。説明後、各項目についてご意見をお願いします。

(小池教育部長) (資料に基づき説明)

### 【基本理念】

(金澤教育長) 学校現場の現状について説明する。校長が教育大綱の理念を学校経営に反映させるべく、教育委員会ではいろいろなところで教育大綱を発信しており、学校現場に浸透してきていると言える。しかし、今後は学校だけでなく保護者や保育園などにも広げていく必要があると考えている。基本理念は頻繁に変わっていく

ものではないと思うが、基本理念の「子どもたち一人ひとりの個性が輝き、幸せを創り出していける」という文章は、「自分の幸せだけでなく、他人の幸せも考えて、世のため人のために行動できる子どもを育てる」という、広い視野の幸せを創るといふ基本理念の趣旨が正しく理解されずに、各個人が自分の幸せだけを創り出せばいいんだ、と捉えられてしまう恐れがある。しかし、他人や社会の幸せも創り出していけるということが大切である。文章はこのままでいいが、基本理念の趣旨がしっかりと伝わるような作りにした方がいい。

(青柳委員) この大綱を策定する時の総合教育会議に参加していた。人は何のために生きるのかという問いが出た時に、自分が幸せになっていくことで社会貢献ができたらいいいという意見が出た。他者のために生きるという気持ちを持ちながら、自分も幸せになっていくという繋がりのある基本理念である。

(磯田市長) 幸せの中身には社会貢献も含まれているが、確かに今の文章だけでは伝わらないかもしれない。

(鷲尾委員) 企業経営者の立場で話をすると、単に儲けたくて起業する人はいるが、そういうタイプの経営者はどこかで行き詰まる。社員やお客様の幸せを実現するという次元に行かなければ、次のステージには行けない。同じことだと思う。

(大久保委員) 今の子どもたちは小さい頃からスマホやタブレットを使っている。そればかり見ていると、自分のことしか考えられなくなってしまう。また、思ったことをすぐにSNSに上げたり、社会が利己的になってきていると感じる。人のため、社会のためということは大切である。

(荒木委員) 教育長と同じ意見である。

(磯田市長) 現場の教員の意見を聞きたい。

(神林学校教育課主幹兼管理指導主事) 現行の教育大綱が策定された平成27年度は小学校の校長だった。当時の総合教育会議の会議録を読んで、基本理念に強いこだわりがあることがわかった。自校の教員に対しても職員会議で話をした。大きな意味を持っているので、この基本理念は大切にしていきたい。

(高橋学校教育課主幹兼管理指導主事) 教員や教育関係者であれば、幸せは自分のものだけでないと思うが、子どもの目線で基本理念を見ると、自分のことを想定すると思う。子どもに浸透させたいという想いがあれば、言葉を追加した方がいい。

(磯田市長) 人が幸せになることで自分も幸せになるという価値観もあり、幸せの定義は難しい。基本理念の中身をしっかりと踏まえたいという趣旨でいいか。

(金澤教育長) そのとおりです。

(磯田市長) 教育大綱の基本理念にはこのような意味がある、と説明書きを入れるという形でよろしいか。

(「異議なし」)

### 【基本方針1】

(荒木委員) 協働という言葉だが、以前は「働」ではなく「同」だった。異なる個性を持つ者が互いの良さを出し合いながら新しい価値あるものを作り出していく、簡単に言うとコラボという言葉が使われているが、この協働がこれからの社会に必要なものである。正解がなく、みんなで納得する答えを求めていく社会に協働という精神はなくてはならない。協働という言葉が教育大綱に入れるのは意味がある。

### 【基本方針2】

(金澤教育長) 長岡市は、全国に先駆けて子育て支援と学校教育に教育委員会が一貫して取り組んでいる。今回、基本方針4に「子育て支援」についての項目を作ったので、基本方針2では長岡市の特色である一貫した取組をより鮮明に出したものである。

(磯田市長) ここでも協働という言葉が出てくる。

(金澤教育長) 子ども同士の協働も必要であるし、組織同士の協働も必要になってくる。

(磯田市長) 異なるプレイヤーが一緒に共通の目的のために動くのが協働である。

(金澤教育長) 教員や保育士が協働しながら、切れ目のない教育支援を行っていく。

(荒木委員) 平成30年度に保育所保育指針が改正された。これまで保育所では教育という言葉を使っていなかったが、今回の改正で保育所が幼児教育を行う施設として位置づけられた。現行の大綱は子育て支援と教育に一貫して、とあるが、保育指針の変更を長岡市がしっかりと受け止めて整理した見直しである。

### 【基本方針3】

(青柳委員) 教育大綱を作る時に大切にしなければならないのは、どんな人の心にも届く大綱でなければならないということである。教育長から学校現場には浸透しているが、これからは保護者の方にも浸透させたいという話があった。教育に携わっている人間だけがわかる言葉ではなく、誰が読んでもストレートに伝わる言葉でなければならない。そう考えると、「オール長岡」は市民にわかっていただけの言葉なのだろうか。

(大久保委員) 「オール長岡」はいい言葉だと思う。自分の子どもが米百俵未来塾に参加しているが、いろいろな民間団体が携わっているオール長岡の象徴的な事業である。

(鷲尾委員) 私も「オール長岡」はいい言葉だと思う。

(磯田市長) 冒頭の挨拶でも言ったが、教育に関すること全てを学校に求めるわけに

はいかない。コミセンでの放課後子ども教室やスポーツ少年団の指導など、長岡では学校外での子どもたちの活動に地域が尽力している現状がある。長岡は市民協働による教育が他の市町村より進んでいる市だと考えている。地域共生社会、ダイバーシティという言葉もあるが、一つの標語として「オール長岡」は違和感のない言葉である。地域であり、スポーツ団体であり、一人ひとりが子育てや教育に係わっていくという意味である。

(荒木委員) 私も「オール長岡」という言葉が好きである。米百俵未来塾にコーディネーターとして参加しているが、長岡市にしか用意できない素晴らしい世界である。それよりも私は、「オール長岡で子どものやる気や学ぶ意欲を高め」というフレーズと「夢を描き志を立てて生き抜く」というフレーズが繋がるのか疑問がある。河井継之助の「十七天に誓って補国に擬す」が非常に強いインパクトを持っているため、長岡市では志を立てるという言葉がよく使われるが、子どもたちは義務教育の段階で志を立てるところまで行くのだろうか。ベースを作るのは大事だが、義務教育はそのベースを作る期間なのではないか。山本五十六は薩摩の海軍を倒すために海軍兵学校に入ったが、15歳を過ぎてからだ。志という言葉は乳幼児期から義務教育終了までの期間の大綱にとってタイムリーな言葉なのだろうか。次に、「生き抜く」という言葉だが、先に厳しい世界が待っているということが前提の言葉である。大人目から見ると確かに厳しい世界であるが、子どもたちのことを考えると、自分の可能性を信じ、夢や希望を持って生きることによって明るい未来が待っている、と言った方がいいのではないか。

(金澤教育長) 生き抜く力を育むことができる能力、素地を作ることが新しい「熱中！感動！夢づくり教育」の大きな目標として掲げられている。意味合いとしては荒木委員が言ったことと同じだと思うが、この大綱の文章だけではわかりにくいかもしれない。次に「生き抜く」という言葉だが、今は「生きる力」より「生き抜く力」が一般的に多く使われている。それは、作った大人達がこれからは厳しい世界が待っているということをわかっているからだ。ただ、子どもたちには明るい未来が待っていると教えた方がいいのではないか、という点においては荒木委員と同意見である。しかし、戦争、震災を経験している長岡に住んでいる子どもには「生き抜く」という言葉は違和感がない言葉だと思う。

(荒木委員) 確かに「生き抜く」という言葉は長岡にピッタリな言葉だと思う。平成国漢学校で米百俵の精神について学んだ時に、米百俵の精神には「危機意識」「生き抜く」「知の総動員」という要素があり、生き抜くためにはいろいろな考え、知識を持っている人の力を総動員して、危機を乗り越えていこうという意味が込められているという話になった。長岡で「生き抜く」という言葉を使う時は、その横には危機意識があるということを強く感じた。

(鷲尾委員) 自分のことを振り返ってみると、自分という人間は小学校5、6年生ぐらいの頃にできたと思っている。その後の経験で後天的に身に着けたものもあるが、自分の核となる部分は義務教育の時にできたと思っている。また、3人の子どもを見ても、小学校の高学年から中学校の時から本質的に変わっていないと感じる。志というレベルに行くか行かないかは別にして、メッセージを大綱に込めることは賛成である。次に、「生き抜く」という言葉だが、親は子どもに対して、自分が先に死んでも生き抜いてほしいと願っているものだ。また、子どもは小学校5、6年生の頃には十分大人になっており、子どもなりに社会に出ていくことの大変さについて様々なものから学んでいる。「生き抜く」という言葉を突き付けたからと言って、社会で生き抜くことに悲観しないはずだ。また、私は「悲観的に想定し、楽観的に行動する」という言葉が好きである。物事には苦難があるということを前提にして、そこをどう生き抜くのかというメッセージを子どもたちに送ることも重要である。

(大久保委員) 教育大綱は子どもだけでなく、保護者、市民も目にするものである。強い言葉だと感じるが、伝わる言葉だと思う。

(磯田市長) 生き抜く子どもになってほしいというのは、大人の愛の表現である。めげない、負けない、どんな苦難にも耐えていく子どもを育てたい、という意味である。「長岡市はフェニックスシティだ。」と言うと笑う人もいる。不死鳥の町という標語を使っている町は世界にない。笑われても、二度の戦災で虐げられても、明治150年の近代化の中では敵方という側面もありながらも、長岡は常に未来のことを語っている。長岡の負けじ魂がこの教育大綱に込められている。また、オール長岡は理解していただける方も増えているので残したい。

#### 【基本方針4】

(磯田市長) 寄り添うだけでも丁寧な表現である。「丁寧に」という言葉は外してもいいのではないかな。また、この子育て支援についての方針があるのが長岡市の教育大綱の特徴である。

(荒木委員) 長岡市は子育て支援が充実しており、県内に誇れる状況になっている。それをより強化するという方針になっているところがいい。

#### 【基本方針5】

(磯田市長) 来年度予算の中で検討しているのがICT環境の整備である。私は全ての子どもに1人1台のパソコンを与えることで今までできなかった教育ができ、子どもたちの学びが進むならば、積極的に投資をする意味があると思っている。新しいICT機器の導入についての意見を聞きたい。

(荒木委員) ICT機器の導入は画期的である。これからの学校教育、授業の姿その



ものを変えていくものだと思う。長岡市が県内で先駆けて導入して、授業改革を促していくのは教育のまち長岡にふさわしいことだ。ただし、導入して終わりではなく、そこから授業改革、新しい授業づくりを長岡市全体として、教育行政として取り組んでほしい。

(鷲尾委員) 私の子どもが通った県立高校はスマホの持ち込みが禁止されていた。その代わりに学校から電子辞書を買うように言われた。スマホは電子辞書の代わりになるのに、何万円もする電子辞書を購入させるのは、保護者に新たな負担を求めるものだとPTA会長をしていた時に学校に申し入れたことがある。しかし、スマホはいじめや盗撮の原因となるという様々なネガティブな面を強調され、スマホを学校に持ち込むのは駄目ということを言われた。ICT機器は常にこのネガティブな側面とポジティブな側面がせめぎ合っているものだ。教員がどれほど利用できるかという課題はあるが、子ども1人ひとりにパソコンを用意したいという市長の考えはすばらしい。長岡市が先陣を切ってICT機器を有効活用してほしい。

(大久保委員) タブレットなどは、勉強以外に使うものだと考えられている。親もタブレットの良さはわかっているけど、勉強での使い方は知らない人が多いはずだ。学校が授業でタブレットを使うようになれば、それが家庭でのより良い使い方に繋がるのではないかな。

(青柳委員) ICT機器の導入は、時代のニーズに即した新しい授業改革だと思う。浸透するまで時間がかかると思うが、新しいことを始める時は仕方ないことだ。ぜひチャレンジしてほしい。

(磯田市長) 授業改革という話が出たが、現場の先生の意見を聞きたい。

(神林学校教育課主幹兼管理指導主事) 今までパソコンルームに行かなければできなかったことが、普通教室や体育館でできることになるため、授業は多様化すると思う。学校現場がいかに使いこなすことができるかが重要であり、教員の研修が必要である。また、教育委員会がいろいろな学校の好事例を市内の学校に周知する取組も必要である。

(高橋学校教育課主幹兼管理指導主事) タブレットの導入は賛成である。しかし、授業改善をするためにタブレットなどのICT機器が必要だということでは、学校現場は行っていないのが現状である。タブレットが用意されても、すぐにどの授業でも何十時間も使うようにはならないはずだ。

(磯田市長) 大量に公費を投入するためには目的が必要である。子どもたち一人ひとりの学習段階に応じた個別の対応が先生一人では難しいので、子どもたちの個別の進度に合わせられるタブレットを導入する、という発想にならないだろうか。タブレットの導入が黒船来航のように思われて、「さて、どうしようか。」となってしまっていると、先生の負担が増えてしまう。

(高橋学校教育課主幹兼管理指導主事) スマホの話が出たが、今の子どもはわからないことがあればすぐスマホで調べる。最初からいろんなことをICT機器でやろうというよりも、最初は調べ学習や情報共有から入り、ICT機器の可能性が広がるというイメージを持って取り組んだ方がいいのではないか。

(磯田市長) 初めから可能性の全てを認識できている人はいない。確かにやりながらということもある。

(青柳委員) ICT機器の導入により、教育の平等性が保てるのではないか。例えば、特別支援教室に通わなければならぬ子どもが、普通教室で学ぶことができるようになるかもしれない。

(磯田市長) タブレットがあれば個別の対応ができる可能性がある。ICT機器を積極的に取り入れていくのが長岡の教育であり、去年から学校外でプログラミング教育の場を設けた。ロボカップ、ロボコンといった楽しみも含めて、先端的な技術を使った学びの場は必要だと認識している。教育大綱が対象とする分野においてもICT機器の導入を積極的に進めていきたい。使い方が一番大事であるため、教育委員会に頑張ってもらいたい。他に意見はないか。

(荒木委員) 基本方針5に「質の高い教育環境の整備」とあるが、長岡市には複式学級があり、子どもたちの教育環境に大きな差があると考えている。これからの社会には協働が必要だと言ったが、固定化した人間関係の中では協働することが難しい。

(磯田市長) 教育環境の格差について、教育委員会としてどう認識しているのか。

(金澤教育長) 子どもの数で教育活動が制限されるのは事実である。国が示している適正規模というものはあるが、長岡市として実態はどうかという方が大事である。1クラスの人数が1桁になると合唱も質が違ってくるし、集団スポーツをやろうと思ってもできなくなる。多様な意見のやりとりもできなくなる。ただ、目が届きやすくなるというプラスの意見を言う人もいる。外れてはいないが、極端に数が少ない学校は何かしらの手立てが必要だと認識している。離島がいい例だが、へき地の学校などはその中で最善の環境を作る必要がある。青柳委員の言ったようにICT機器を活用することもひとつの手法である。子どもたちにとってより良い教育環境については、単純に数だけでは言えないが、数が少ないことは負の側面もあることは認識しなければならない。それをどのように是正するのは手法の問題である。統廃合もひとつの手法である。

(鷲尾委員) 校長と意見交換をした際に、不登校が多いと言っていた校長に「不登校の原因は何だと思いますか。」と尋ねたところ、「保育園、小学校、中学校が一つしかないため、固定された人間関係がシャッフルできず、劣等感ができると払拭できないのが原因ではないか。」と言っていた。荒木委員の言っていた小規模校の問題の一つだと思った。逆に小規模校の良さを言う校長もいた。しかし、自分は荒木委

員の考えに賛成である。自分は部活動を大事にしたいと考えているが、部活動を維持するためには、ある程度の人数が必要である。部活動は上下関係や横の関係、協働する力の土台ができる。学校の統廃合を地域にゆだねるのではなく、教育委員会がもう少し係わった方がいい。

(荒木委員) 閉校した学校の最後の校長になったことがある。もっと反対の声が多いと思っていたが、保護者から統廃合の話を出すのが遅かったと言われて驚いたことがある。親は子どもの成長を願い、子どもにとってより良い環境を求めている。その一方で、学校がなくなるということは地域の中心がなくなるということでもあるが、小規模校の統廃合はなんらかの形で検討するべきだと思う。

(磯田市長) 基本方針5の趣旨とは少し離れているが大切なことである。小国小学校の統合は、保護者を中心とした賛成があったから地域がうまくまとまった。子どものことを考えると、小規模校で人間関係が固定されるのはよくないという認識が保護者の中にはあるのだろう。今は地域から統廃合の話が出たら受けていくというスタンスだが、もう少し市が前に出た方がいいということであれば、考えていきたい。次期教育大綱の計画期間の中で動ける部分があればしっかりと動きたいため、教育長ともよく相談したい。

(磯田市長) 最後に、全般通して何か意見はないか。次回は、1月中旬に開催を予定している。その時に本日出た意見を踏まえた改定案をお示ししたい。

(小池教育部長) 以上で令和元年度第1回総合教育会議を終了する。